り、銘に曰く、日本第一大靈驗所、根本熊野三所權現と。

青岸渡寺　夫須美神社の傍にあり。天台宗にして、那智山觀音堂と號す、西國三十三所第一番の札所たり。仁德天皇の御宇裸形上人の開基にして、推古天皇の御宇、勅願により伽藍を建立す。本尊は上佛上人の刻みたる長一丈の如意輪觀世音菩薩にして長八寸なる閻浮檀金の如意輪觀世音を胸佛とす。本堂は、十三間四面にして、屋根は栩葺き破風作りとし、天正十八年、豐太閤、大和秀長をして建立せしめたるものなり。寺域に鐘樓、寶藏、御供所等あり。往時は、瀑布の下に千手觀音堂及び不動堂ありしが、星霜久しくして頽敗に及び、明治十年これを毀ちて本尊を本堂に移し安ず。其の千手親世音は立像の黄金佛にして、華山法皇西國二十三所御順拜の時、惶くも玉體に懸けさせ給ひ、御順拜を畢はりて瀑下に納めさせ給ひたるなり。什寶としては佛像の畫軸、古代の佛具等種々あり。

中邊地に沿うて那智の傍を過ぎ、大雲取山の嶮路を經。この嶺は海拔九百八十三米に達し、山路頗る險難、上下二百町の稱あり。推して國内第一の高嶺となすべし。その山陰を上長井驛といふ。上長井より再び小雲取山を越えて、靖川村より本宮村に達す。靖川村大字皆瀬川には硫黄泉湧出す。大塔河畔に位し、溫度百五十八度、旅舍數戸あり（北一里餘にして湯峰溫泉に達す）。天滿より、本宮村に至る約十一里、その間車馬の便なし。三千風「雲取は笠に爪つく雲雀哉」齋藤拙堂、踰雲取山「雲間縹渺上崔嵬、烏道凌空人馬哀、誰識武侯雲鳥陣、崢嶸化作此山來」新田斷常、大雲取坂紀南第一嶮路也「熊野南方第一關、大雲度嶮路難攀、巉岩僮下投深壑、荊棘鉤人轉步艱」新田斷常、小雲取坂「九回七曲陟羊腸、忽遇石車頓路傍、幸自山花開似錦、綠雲堆裏紫雲香（里俗喚仆石做石車）」。

本宮村　新宮町を距る陸路凡七里、熊野川により水路凡九里といふ。もと熊野坐神社あるを以て本宮の名稱を得たり。中邊地諸驛中の大村にして、人口千三百を有し、市街やゝ繁華なりしが、明治二十二年八月大洪水の爲めに全村流失し、今日に於てはまた昔日の觀なし。されど熊野川は大和より來りて驛北を流駛し、熊野神社の大華表は屹然としてその水流に臨む。川は、由來天下の山水を以て稱せられし地、此地に遊びたる旅客は此より乘合舟を求めて新宮町に下るを可とす。その兩岸の風光の絶佳な

前後二十次に及ぶといふ。浴場五ヶ所、旅舍數十所ありて、浴客常に絶ゆることなく、一年の浴客數凡そ一萬三千人に及べりといふ。寔に山中めづらしき名湯にして時には絃歌の聲をさへ聞くことあり。開湯は崇神天皇朝にして、熊野國造大阿刀宿禰これを發見すといへり。

東光寺　湯峯河畔にありて、不動の瀧の流れを前にし、石橋を架す。往古、鳥羽天皇の勅願所として建立したる三間四面の本堂は、天正中豐太閤、片桐且元を奉行として修繕せしめ、本尊の藥師如來と共に星霜の久しきを表す。內陣の扉には、日光、月光兩菩薩の畫あり。兆典司の作といふ。本尊は長二丈一尺の坐像にして、湯の花の凝りたる巖なり。胸部に無數の竅ありて、往古は其の竅より溫泉を湧出したりといふ。裸體上人の勸請して本尊とせるものなり。則ち胸部より以下を埋めて、地を平にし、堂宇を創建す。大同四年、弘法大師、錫を巡らし來たりて、新に十二神將及び日光月光の兩菩薩を刻みて安置し、中興す。天長十二年、慈覺大師ふたゝび重興す。後、覺鍐上人來遊し、不動の像を刻みて安置す。歷聖の熊野に御幸ましましける時、惶くも御幸ありて、鳥羽天皇には、本堂及び多寶塔、鐘樓等御寄進あらせ給ひたりき。多寶塔は方三間、高さ三丈の二層塔にして、後豐太閤修繕を加へ、明治の初年まで傳はりたるを、故ありて本宮に於て撤壞する所となれり。此の時、寺も無住の廢寺となりたるを、村民これを惜み、協同して、官に請ひ、明治十四年に至りて允可を得、本尊の靈光もふたゝび輝くに至る。此寺は元來眞言宗なりしを、後に本宮の管理する所となり、今は又信徒の企望によりて、天台宗たり。寶物には、平相國の眞筆と傳ふる紺紙に金銀泥をもつて寫したる羯磨經一卷、小松內府の眞筆と傳ふる五色の紋紙に寫したる法華經一部以下あり。

本宮より熊野川に沿ふ道は北行して大和に入り、中邊地街道は伏拜より三越峠を踰えて西牟婁郡の近露村に達し更に田邊町に向へり。

熊野川（北山川）　和州の十津川、當郡に入りて熊野川また新宮川と稱す。本宮にて

る、寔に國内有數の景勝たり。三十三所圖會曰「本宮は田邊城下より三超嶺を經て行程凡そ十三里半、市街は商工の家ども軒をつらね、交易に隙なく、且、社職御師の宅若干ありて、國々を定めて支配の立家それ〴〵旅客を一宿せしむ。謂ゆる伊勢の御師に等し。御板牛王寶印等をも御師より出す。また町宿の類は音無橋より北に多し。至つて繁昌の地なり」。

熊野坐神社　本宮村字板戸に鎮座す。今、國幣中社に班し、熊野本宮證城殿と稱す。新宮、那智を合せて三山の稱呼あり。而も當社はその第一位に居る。偶々、明治二十二年の水難に神殿の大半は流亡し、僅に石寶殿二所を止め、鬱蒼たりし域内の樹木もまた悉く枯死し去れり。爾後更に舊社の後方高燥の地を卜して四殿を造營し、明治二十四年三月落成す。卽ち第一殿は伊弉冊尊、第二殿は速王男之命、第三殿は素盞嗚尊、第四殿は天照大神を奉祀す。これを上四社と稱し、舊石寶殿は中四社、下四社と稱し、合せて十二社あり。社殿の結構いづれも清麗を極め、境内も甚だ幽雅なり。創

建は實に崇神天皇朝六十五年と稱す。歷代天皇の行幸ありしは、平城天皇、清和上皇、宇多法皇、花山上皇、白河上皇、堀川院、鳥羽法皇、後白河上皇、後鳥羽上皇、土御門上皇、龜山上皇等にして、就中、後白河法皇は御幸三十四度に及べりといふ。毎年四月十五日を以て大祭を執行し、賽者遠近より至る。什寶の重なるものには、飛鳥井大納言筆建仁御幸記、源通村及び爲景卿筆御幸略記等あり。千載集「うれしくも神の盟をしるべにて心をおこす門に入りぬる」。西行法師「たちのぼる日のあたりにぞ雲きえて光りかさなる七越の峯」。大僧行尊「わくらはに何とか人の問はざらん音なし川にすむ身なりとも」。後白河院「はる〴〵とさかしき峯を分けすぎて音無川をけふ見つるかな」。

湯峯溫泉　本宮村の南方約一里餘なる四村大字湯の峯には著名なる湯の峯溫泉あり。湯の峯川に沿ひ、數ヶ所に湧出し、光明湯・玉の湯・小栗の湯（小栗判官助重入浴の湯といふ）の三泉に分つ。効驗著しければ文武天皇以下數代の至尊行幸あらせ給ふこと

前後二十次に及ぶといふ。浴場五ヶ所、旅舍數十所ありて、浴客常に絶ゆることなく、一年の浴客數凡そ一萬三千人に及べりといふ。寔に山中めづらしき名湯にして時には絃歌の聲をさへ聞くことあり。開湯は崇神天皇朝にして、熊野國造大阿刀宿禰これを發見すといへり。

●●● 東光寺　湯峯河畔にありて、不動の瀧の流れを前にし、石橋を架す。往古、鳥羽天皇の勅願所として建立したる三間四面の本堂は、天正中豊太閤、片桐且元を奉行として修繕せしめ、本尊の藥師如來と共に星霜の久しきを表す。內陣の扉には、日光、月光兩菩薩の畫あり。兆典司の作といふ。本尊は長二丈一尺の坐像にして、湯の花の凝りたる巖なり。胸部に無數の竅ありて、往古は其の竅より溫泉を湧出したりといふ。裸體上人の勸請して本尊とせるものなり。則ち胸部より以下を埋めて、地を平にし、堂宇を創建す。大同四年、弘法大師、錫を巡らし來たりて、新に十二神將及び日光月光の兩菩薩を刻みて安置し、中興す。天長十二年、慈覺大師ふたゝび重興す。後、覺鍐上人來遊し、不動の像を刻みて安置す。歷聖の熊野に御幸まし〳〵ける時、惶くも御幸ありて、鳥羽天皇には、本堂及び多寶塔、鐘樓等御寄進あらせ給ひたりき。多寶塔は方三間、高さ三丈の二層塔にして、後豊太閤修繕を加へ、明治の初年まで傳はりたるを、故ありて本宮に於て撤壞する所となれり。此の時、寺も無住の廢寺となりたるを、村民これを惜み、協同して、官に請ひ、明治十四年に至りて允可を得、本尊の靈光もふたゝび輝くに至る。此寺は元來眞言宗なりしを、後に本宮の管理する所となり、今は又信徒の企望によりて、天台宗たり。寶物には、平相國の眞筆と傳ふる紺紙に金銀泥をもつて寫したる羯磨經一卷、小松內府の眞筆と傳ふる五色の紋紙に寫した

る法華經一部以下あり。

本宮より熊野川に沿ふ道は北行して大和に入り、中邊地街道は伏拜より三越峠を踰えて西牟婁郡の近露村に達し更に田邊町に向へり。

●●● 熊野川（北山川）　和州の十津川、當郡に入りて熊野川また新宮川と稱す。本宮にて

音無川を入れ、請川にて請川を合はせ、宮井にて大和より來たれる北山川に會し、やうやく巨流となり、蜿蜒縈廻し、高田、笹川等の細流を容れ、以て海洋に出づ。濶さ三町、長さ十六里九町、すべて舟楫を通ずるも、北山川は、本郡に入りて、十四里の長流中、舟楫を通ずる處は僅に六里の間なり。本宮より船にて熊野川を新宮に下るに宮井に至る兩岸は層巒起伏して、水と共に東に走り、其の少しく疎なる所、左に高山、右に請川の村落あり。屏風島を過くれば、網代が淵は、深潭量るべからざるに、五十丈許の巨巖、淵に臨みて顚倒せんとし、奇嶮眼を愕かす。佛巖、三重石等を左右に見て、宮井に至れば、こゝに北山川の長流落ひ會ひて、汸々然として、水流うたゝ洪なり。こゝより船を牽かしめて、北山川を泝ること三里餘にして、玉置口に至れば、兩郡の岸窄まりて、之れを入れば、支那の赤壁も、こゝには遠く及ばざらんとす。即ち名高きどろ八町これにして、詞人修して、瀞溪と稱づけたり。（後段に出づ）宮井より熊野川を下れる兩郡左右の勝景は熊野遊記によくこれ寫せり。其が中を擢擧すれば、

「和氣村、石蛭流曼、與上游異觀、既左嶺崒然而起、怪巖森々立者、側者、若將翔者、若走者、若神握蛇者、若六首八臂者、且怒且狂、奇形異狀、山海王會、不按圖而目擊悚然、右方蒼壁數仞、葛藟覃焉、走二十步許、古松挿岩隙、得飛泉三、左曰銚子口、右曰布引、各若其名、復左曰蛇蜿、嬰茀以走、其餘懸水飛泉非傑然者則不爲數、眞熊野之富奇也、中略至瀨原村、小流來注、爲鸚鵡川、左山點布黑不、縱横有法、宛然石陣哉、流稍濶、山益潤、舟行緩、目得少間、乍見攢峯若指、曲岸溫麗、復上流之所未覩也、右曰大伴崎、右岸斧劈、片々相倚、植髮干頂、乃新宮山之後也云々」と。更に大八洲遊記に此の川の勝景を記して「若不至瀞溪、其秀可稱述、然比之北上川、兩山稍開、岸上葭葦叢生、惡木茀草、間少秀麗、北上川、重嶂夾水突起、無灌莽榛碍褻眠、況如瀞溪則娟麗無一點瑕疵云々」と評せり。また古へ熊野川を下だる船を杉舟と言へり。和歌に詠めるもの一二首を掲ぐ。太上天皇「熊野川せきりに渡す杉舟のへなみに袖の濡れにける哉」正徹「くまの川山の苔路は埋もれて雪に掉さす瀨々の杉船」。坪谷氏漫

遊記曰「熊野川の奇は蓋し天下に冠たりとは大八洲遊記の作者も言へり。然れども吾人の見る所を以てすれば、未だ間然する處なしと言ふにあらず。其の弊所弱所を擧れば、水の甚だ清からざるその一なり、兩岸の相開けたる其二なり。山の比較的に深からざるその三なり。岩石の多からざる其四なり。されどこれを除きては、瀑の多き、屈曲の頻繁なる、筏舟の多き、頗る雅客の心を惹くものあり。先、本宮を出でゝ屏風島を過れば、深潭量るべからざる網代ケ淵は窈然として其前に開け、五十丈ばかりの大巖の將に倒懸せんとして玆に重れる、殆ど過ぐる者をして膚に粟を生ぜしむ。佛岩、三重岩等を左右に見て宮井に至れば、北山の長流東より來り會し、風光愈よ美なり。小舟を過ぎて揚枝に至れば、一度開けし山再び迫りて、その兩岸の山の高き、處々に小瀑のかゝれる、宛然支那大陸の山水を望むの思ひあり。川は或は屈曲を爲して、深山の中に入り、右に布引の瀧、銚子口の瀧、左に吹雪の瀧等を懸く。此間、山影は山影と相爭ひ、溪流は溪流と相戰ひ、水鳴り、石走りて、舟の震盪すること甚し。淺里相賀等皆なこの水聲山色の中に散在せる山村なり。瀨原に至つて、山やゝ舒び、水漸く緩に、遂に新宮の平地に出づ」。又曰「大八洲遊記の作者は、口を極めて熊野川を賞揚しながらも、猶ほ熊野川の北山川に及ばざること遠きを言へり。蓋し、山深く、流れ急に、靜八町の如き一大奇景を有したればなるべし。この川の勝を探らんと欲せば、熊野川の河舟を小舟村にて捨て、四瀧の渡を渡りて、川の右岸を三里ほど上流に溯らざるべからず。この間、水は山に從つて幾轉回を爲し、竹筒村の峠を越ゆれば、忽然として、山の彼方なる木津呂に出づ。而して靜八町の入口なる玉置口は、この地より僅に一渡頭を隔てたるのみ」。山崎氏地誌曰「熊野川は大和十津川の山中を出でて南流し、本宮以下舟を通ぜり。されど其流域は深山窮谷の中にあるを以て、輕舸の他これを遣るに途なく、恰も駿河の富士川・遠江の天龍川に似たり。されど此川は大和吉野郡及び紀伊の北部に鬱蒼として林を爲せる山林より伐り出せる材木の運搬に於ては自然の好交通路を爲し、日々筏に編みて下流に送る數は殆ど數百を以て數ふるに至れ

り。其支流たる北山川また甚だ其便あり。熊野川は下流を新宮川と稱し、其河口には材木積んで山を成せり。されど、其河口には良港あるを見ず」。この河岸にはまた石炭の產出多し。此は後段に記せん(尙、熊野川上遊及び左岸の名勝に就ては後段に說く所あるべし)

瀞八町　當國の絕勝として世に名高き瀞八町は、南牟婁郡に屬する熊野川の一支流北山川に沿へる多度及び玉置との間凡そ八町ばかりの稱にして、地勢上殆んど大和に屬し、南牟婁郡の木ノ本町よりは約八里餘の北にあり。奔流此處に至りて淀みをつくり、水面鏡の如く滑かにして、兩岸の絕壁は屛風を立てたる如し。溪流の深きところ十五尋、舟を此處に泛べて遊ばんか、赤壁の勝もまた啻ならず。此の溪或は山崩れの爲め河水を閉塞してかゝる一種湖水に似たる狀態を生せりと云ふ說あれども、若し此の湖が山崩れの爲め河流閉塞せられて生じたるものとせば、水餘りに深きに過ぎ、兩岸數十丈の絕壁はまた閉塞湖として說明する能はざる所なり。蓋し思ふに往古玆に一瀑布ありて浸蝕作用の爲めに漸次退却したる遺跡ならんか。地は山間に偏し交通不便

瀞八丁

の處にあるに拘らず、旅人の杖を曳くもの多き、また其の如何に風光の優絕なるかを知るに足らん。又此の上流十數町の處にも新瀞八町とも稱すべき所ありて其の風光の奇絕なる敢へて舊瀞八町に劣らず。坪谷氏曰「瀞八町の景を見んと欲せば、玉置口にて舟を傭ふを必要とす。水子舟を引くこと二三町、溪の入口に至りて、それを放つ。その風景の娟麗にして、中に無限の寂寞を籠めたる、天下またこの奇景ありやと驚かるゝばかりなり。大八洲遊記にその景を敍して曰、「其崖矗者如壁之削、圓者如釜之覆、

横者如屏檻之環、蹲者如虎豹、層者如樓閣、縫裂爲紋、大者如氷裂、細者如穀綯、或附陁、或平衍、可步可攀、有巖洞、窅窕似神仙之居、有屹立山中者、爲蓬壺之容者、一崖未畢、一崖又至、應接不暇、盤亙攢列、如此者凡八町云々」よく形容して眞景を寫したりといふべし。且、同書に畫人依岡三交云、僕嘗遊豐之耶馬溪、其實不及斯溪之奇也、と爾もありぬべし。而して、崖の盡る所、蕭然たる人家三四軒、請へば卽ち人をして泊せしむ。地を田戸と稱し、大和十津川に赴くの間道に當る。此溪の發見は明治以後にありて、石井三重縣知事が縣下巡回の時、始めて此溪あるを知り、大阪の文章家藤澤南岳此地に遊びて、其奇を記せしより、遂に天下に名あるに至れるなり」。藤澤南岳の泥谷(探奇小錄一節)に曰「九日。八月洞溪に遊ぶ。溪は竹筒を距ること一里、而して山路險惡。故に舟以て之れを探る。北山川を泝る一里。湯之口を過ぎて小川に到る。勢之入鹿川來注す。迂回數里。玉井口に至る。完直二子の山路よりせし者。岸に立ち舟を招て以て乘る。乃ち曰ふ。舟に後るゝこと二時にして而して發す。

至れば卽ち舟に先だつこと一時と。舟路の迂なる知る可き已。一棹して崖を廻れば、則ち溪口峻崖數尋、屹立して門を作す。門之內は左右石壁、直立千尺、頂に稚松雜木を戴き、一撮土無き者の如し。水は則ち深綠色にして、巨巖底を作すに似たり。而して深さ數十尋、測る可からざる也。漾々として流れず。舟子櫓を按じ緩々として進む。崖壁幾曲觀、曲に隨ひて改まり、崖岩盡く奇なり。其最も奇なる者。右崖にして而して跌石、蛭岩、牌石、雞冠石、大黑石、條石、左崖にして而して屏風巖、船岩、洽門、釜洞、皆な觀る可し。釜洞、口は僅に身を容れ、其中嵌空、五六十人の坐を爲す。實に奇觀也。之れを要するに、一巖一洞を以て論ずべき者に非ず、蓋し左右之壁、奇狀萬殊相對して僅に十餘步、左凸すれば則ち右凹、一登ゆれば則ち一伏し、呼應映發して自然に章を成す、仰げば則ち靑天、帶の如く、俯せば則ち碧潭、絕淨、恍として洞中に入るに似たり、土人呼で土呂と爲す。字、泥を用ゆ。方言に、水流の緩緩なる者を泥と爲すと云ふ。其字不雅、故に余改めて洞溪に作る。洞川村の例に從ふ也。

嵒品を審視するに。皆斧劈鉞割する者、豈に鬼神、一夜にして闢成する所なる無らん乎。倪黄諸家の諸法皆な具はり、以て畫理を悟る可く。亦以て文章を悟る可し。溪の長さ八丁、八丁之外は、皆な凡山常水、奇と謂つ可し矣。左崖は則ち和歌山縣に屬し、右崖は則ち三重縣に屬す。東口之外は、則ち大坂府の管する所、亦奇なり。東口に近づきしに、忽ち衡門の茅屋を見る。痴想して以爲らく。赤松碧虛之徒が居る所と。舟を繫ぎて遽に上れば。則ち神下村也 餐を傳へて而して去り、舟に上りて再び溪中を過ぐ。道骨、頓に具はるを覺え、怡然自得す。柔櫓嘔鴉、日暮に竹筒に達す。」

松澤炭田 本炭田は九重村及び三津の村に亙り、熊野川岸にありて、採掘面積四十四萬二百十四坪を有す。地質は同じく第三紀泥板岩及び砂岩にして、地層の走向は北二十度東にして十八度東南東へ傾斜す。斷層は階段斷層をなして、熊野川方面に降下し、二斷層の內一は直立落差三十一米突、他は二十一米突あり。炭層は二枚のハサミを有し、三尺八寸あり。第二番坑引立の所にある小斷層面には、母岩に硫化鉛・硫化銅等の局部的沈積したるものあり。而して炭中に百分一、八五の硫黄を含むは一大欠點と云ふべし。明治三十五年の無煙炭產額一萬三千七百九十七噸なり。

音川炭田 本炭田は九重村にありて、採掘面積凡そ十萬五千九百五十坪を有す。運搬は軌道によりて山下に出し、船載して熊野川を下し、新宮町に輸送す。地質は第三紀層の泥板岩及び砂岩にして、砂岩の一部は礫岩狀を呈す。炭層は十津川南岸に露出し、其の露頭に三個の坑口を開く。炭層の厚さ四尺にして、ハサミの厚さ四寸なり。本坑區の南部に一大炭層あり。走向北六十度西、傾斜五十一度三十分東北を示し、直立落差二十米突あり。

奥谷炭田 本炭田は音川炭田を距る西南十餘町、海拔四百二十四米突の山上にあり て、採掘面積十萬五千九百四十九坪を有す。採炭は一度音川炭田に出だし夫れより順路新宮町に運搬す。地質は同じく第三紀層にして、大斷層二あり。一は北二十度東五十度東南南へ傾斜し、直立落差六米突餘あり、他は其の走向傾斜に於ては略々同樣に

して、直立落差三米突あり。其炭質又無煙炭なり。

宮井炭田（一名尾崎炭田）　本炭田は九重村字宮井にありて、音川炭田に接近し、採掘面積十八萬千八坪を有す。多數の坑口中現今採掘せるもの三坑にして、第一番坑はハサミ三枚ありて、其の中盤より第三紀木葉化石を出だす。本炭田は直立落差二十米突餘の大斷層數多ありて炭層膨大すれば必ず斷層近きにありて、炭質又不良なりといふ。明治三十五年の無煙炭產額は一萬七百三十七噸なり。

再び中邊地大邊地の會合驛天滿に戻り、更に熊野街道を進まんに、天滿の北方に接して、濱ノ宮あり。

濱宮（ハマノミヤ）　那智村に屬し、南は大字天滿に接す。那智川の河口にあり。この地は、神步天皇紀に進到熊野荒阪津（亦名丹敷浦）因誅丹敷戸畔者となるもの卽ちこれなりと稱し濱宮の名また天皇が行宮を置かせ給へりしに起因せりと傳ふ。今、村の濱宮神社（渚壽と稱す）の境內に若宮と呼び、天皇頓宮の址を傳ふ。また丹敷戸畔の祠あり。石の寶殿にして、丹敷戸畔命と稱す。村の產土神たり。本社の大神としては、天照皇大神に彥火火出見尊、大山祇命を配し祀る。欽明天皇二十四年の創建に係り、慶長元年の再建といふ。古くは、渚の宮と稱し、源仲正が「よもすがら沖の鈴鳴羽ふりして渚の宮にきねつゞみ打つ」等と詠みたりし宮卽ち是れなりといふ。

補陀落寺（フダラク）　濱宮の傍にあり。天台宗、白華山と稱し、本尊千手觀音は無双の靈佛と稱す。もとは濱宮の供僧坊にして、欽明天皇朝三十年の創立に係り、文武天皇宸翰の日本第一補陀落寺の遍額を眉上に掲ぐ。その額字の左右には昇降二樣の龍文あり、星霜の久しき、額面は旣に半ば朽損せり。本堂は五間四面、寶形造にして、文化四年の改造に係れど、毫も古制を變ぜずといふ。また信徒の者の、國々の靈場を巡拜する時、「補陀洛やきしうつ浪は三熊野の那智の御山にひゞく瀧つ瀨」と誦する歌は、華山法皇の當寺にて詠ませ給ひたる御製なりと稱す。

濱宮の浦は中世錦浦に作りしが、今は赤色の浦と稱す。沖に山成島ありて、平語並に盛衰記に維盛入水のを傳ふ。平語曰く「三月の御山の參詣、事故なく遂げ給ひしかば、濱の宮と申し奉る王子の御前より、一葉

の舟に竿さして、萬里の滄海にうかび給ふ。遙の沖に成りの島といふ所ありき。中將それに舟漕ぎ寄せさせ、岸にあがり、大なる松の木を削りて、泣く〳〵名殘をぞ書きつけられける。祖父太政大臣平朝臣清盛公、法名淨海、親父小松内大臣左大將重盛公、法名淨蓮、三位中將維盛、法名淨圓、年二十七歳、壽永三年、三月二十八日、於那智之沖入水す、と書きつけて、舟に乘り、沖へぞ漕ぎ出で給ひける。思ひ切りぬる道なれども、今はの時にもなりぬれば、さすが心細く悲しからずといふことなし。頃は三月二十八日の事なれば、海路遙に霞みわたり、哀れを催すたぐひがな。只大方の春たにも、暮れ行く空は物うきに、況や是れは今日を最後、只今限りの事なれば、さこそは心細かりけめ。沖の釣舟の波に消え入るやう覺ゆるが、さすが沈みも果てぬを見給ふにつけても、御身の上とや思はれけん。己が一つら引きつれて、今はと歸る雁かれの、越路をさして鳴き行くも、故郷へ言傳せま欲しく、蘇か故國の恨みまで、思ひ殘せる限りもなし。こはされば何事ぞや、猶妄執の盡きぬとこそ思ひかへし、西に向かひ、手を合はせ、念佛し給ふ心の中にも、さても都には、今を限とはいかでか知るべきなれば、風の便りの音づれをも、今や〳〵とこそ待たんすらめと、思はれければ、合掌をみだり、念佛を止め、聖に向かひて宣ひけるは、哀れ人の身に妻子といふ者をば持つまじきものかな。今生にて、物を思はするのみならず、後世菩提の妨げとなりぬる事こそ口惜しけれ。只今も思ひ出でたるぞや。かやうの事を心中に紛せば、餘りに罪深むる間、懺悔するなりとぞ宣ひける。聖も哀れに思ひけれども、我さへ心弱くしては叶はじとや思ひけん。涙おし拭ひ、さらぬ體にもてなし、(中略) 少しも過ち給ふべからずとて、瀬に鐘うち鳴らし、念佛を進め奉れば、中將然るべき善知識と思しめし、忽に妄念を飜し、西方に向かひ、手を合はせ、高聲に念佛百遍ばかり唱へ給ひて、南無と唱ふる聲共に、海にぞとび入り給ひける」。なほ、風雅集には、建禮門院右京太夫の右近衛中將維盛熊野浦にて失せにけるよし聞きてよみ侍りける、といへる前書ありて、其の歌を載す「かなしくもかゝるうきめをみくまゝに浦半の涙に身を沈めける」。爾るも實は入水せず、入水せしやうにして、竊に色川村に遁れ匿る、今同の村の大字色川（日色川は那智滝の西一里半にあたれり）に清水某氏ありて維盛の後裔なりといふ。不審。宇久井村は濱宮の西一里にあり。東は佐野村に接す。佐野、古は狹野に作る。原史代神武天皇の越えさせ給ひしはこの地なりと獻く。海岸には松原連續して、風景頗る佳し。またこの浦には青黑交雜せる圓平形の小石堆疊せり。潤澤平滑にして、恰も琢磨を經來れるが如し。世俗、これを那智黑石と稱し、試金石または碁石として盛に行ゆ。蓋し、熊野山の上游北山川瀞八町附近に於て發育せる變質粘板岩の熊野川流水の爲めにその地まで運搬せられ、更に海波の爲めに濱邊に打上げられたるものなるべしといふ。大八州遊記曰「佐野小聚落也、神武帝紀所謂、越狹野至神邑也、濱海小礫堆壘、大如碁子、黑白相間、最可愛也、世呼爲那智黑石者是也」。紀曰「皇軍至名草邑、則誅名草戸畔者、遂趣狹野、而到熊野神邑、且登天磐舟仍引軍、漸進海中、卒遇暴風、皇船漂蕩、而進至熊野荒津坂」。吉田氏曰く「按に狹野は神武天皇々師進擊の路程を推定する中樞と謂ふべし。荒津坂丹敷浦は佐野神倉山の以東にあるべきことを以て證明するに足らん。一説、荒津坂は佐野以西の那智浦にあると云ふもの信據しがたし」。萬葉集「しろしくもふりくるあめが神之崎（みぬかさき）狹野のわたりにひともあら

なくに」、「三輪の崎ありそも見えずなみたちぬいつくへ行かむよき道はなし」。後鳥羽院「忘れすよ松の葉こしに波かけて夜ふかく出でし佐野のつきかげ」。三所圖會曰「三輪崎村は、御手洗坂の下なる浦里なり。新宮より此所まで行程一里、鯨つきの漁場にして、鯨舟數艘あり。此より佐野の遥海上はるかにして際もなし。謂ゆる風景の地なり」。

三輪崎町　人口四千三百を有する大村にして、一小市街をなし、捕鯨の業盛なり。孔子島、鈴島の二島は海岸に近く波間に峙ち、風光頗る明媚なり。一地志曰「三輪崎は紀州南部の都邑新宮町をその附近に有するのみならず、新宮町の海濱、熊野川の河口、沙濱平滑にして船舶の寄泊に便ならざると、紀州山中の材木が熊野川によりて多く搬出せらるゝとによりて、頗る交通の要衝を爲し、船舶常にその灣内に輻湊す」。

新宮町　熊野川の山を出て海に注がんとする處にあり。紀州南部の一都邑にして、郡役所、裁判所、稅務署、新宮中學校等皆此地にあり。地勢は山を負ひ、海に添ひ、川に臨みて、百貨の集散甚だ盛なり。只、熊野川の河口泥沙深くして舟を繫ぐに足らざるが爲に、一里以西の三輪崎を以て、汽帆船舶の碇繫所と爲せるを不便とす。人口一萬六千餘を有し、市街の光景甚だ整頓せり。新宮城址は市街の西一丘阜の上にあり、源平の頃、新宮十郎義盛の居城たりしもの、維新前は水野氏これを領し、一萬五千石を食めり。和歌山市より此所に至る五十七里十九町余といふ。町に丹鶴山東仙寺あり、源爲義の息女にして熊野別當敎眞が妻女たりし鳥居禪尼の建立と稱す。また、無量壽寺あり、法灯國師自筆の畫像讃及び唐畫の佛涅槃畫像を所藏すと聞く。猶、神武紀に謂ゆる軍至名草邑、逐越狹野、至熊野神邑とある熊野神邑はこの地を指すものとも傳ふ。參考本盛衰記に文覺この浦へ着船のこと見えたり。日本水路志曰「新宮はこの近海の和船貿易の大市場にして、その貿易品は重に平底舟にて、熊野川より落し來る木材及び下等の石炭を輸出す（他にオミカゲ石の產出もあり）。川口より入ること一海里半にして南岸に新宮の大邑あり。邑の前面に位する新宮城は今や敗壞に屬すと雖も、海面より望めば樹間に白壁を現し、極めて顯著なり云々」。大八洲遊記曰「新宮城、卽水野侯所築、因阜、疊壁皆疊石、拔地數十丈、城櫓睥睨、皆已毀撤、其地北枕

熊野川、河川環城入海、河北則峯岫、蜿蜒起伏、沿海連伊勢、西瞰新宮坊市、煙火三千、樓閣參差、其脊則神倉諸山。聳立排空、引尾南走、南則岡阜陀陁、東則平畤桑麻、盧合蔭映、遠以蒼溟、海天渺々、極目無際、舟帆出沒、登覽之美、在明光浦上」。

熊野速玉神社　新宮町の北部に鎮座し、世に熊野新宮神社と呼び、現今、縣社に列す。昔時は、那智熊野、本宮熊野と共に熊野三山の一として、社殿の壯麗三山中の第一位に推されしが、明治十七年舞馬の災に罹りて炎上し、社殿一宇を殘さず灰燼に歸せり。後、二十七年に至り再營の運びに至りしが、また昔日の盛觀はこれを觀るにな く。當社、初めは无漏郡切部山の西方北海岸なる玉那木淵の上の松樹に天降ありしが更に熊野新宮の南、神倉山に渡り給ひ、次に新宮の東、阿須賀神社の北、石淵の谷に勸請あり、後、景行天皇の五十八年に至りて當所に遷徙鎮座あり、新宮と稱し奉ると、これ緣起の略なり。列聖のこの社に尊敬ありしこと頗る厚く、仁德、天武、平城、清和、宇多、華山、白河、堀河、鳥羽、後鳥羽、土御門、後嵯峨、龜山等列聖の行幸あらせ給ふ中に、平城天皇は五回、鳥羽天皇は八回、後白河天皇は十五回に及ばせ給ひしといふ。地名辭書「明治十六年の回祿、神輿庫、寶藏は幸に難を免れたり。故に神輿一基、神幸用船一隻其他神寶類二十六種は美術工藝品の目を以て明治三十一年國寶簿に登錄す。ことに木造着色夫須美神坐像一軀、木造着色伊邪那美神坐像、一軀は同時に國寶に入る。猶ほ著名なるは古鞍竝に輿鐙一具御劍二口鉾四本弓矢平胡籙等また鏡手函櫛笥の類中古近古の帝王諸相の家より進献せしめたるもの多し。古簡は土御門天皇詠進和歌三卷を始め文書類數十通あり」。檢校法親王「椰の葉にみかける露の速玉を出す處の宮や光りそふらん」。中原師光朝臣、熊野の新宮にてよみ侍る、「天くたる神やねかひをみつしほの湊に近きちぎのかたそ木」定家卿後鳥羽院、熊野にまゐらせ給ひけるとき、新宮三節御會に　庭上冬菊といふ題をよめる「露おかぬ南の海の濱ひさし久しくのこる秋のしら菊」。

阿須賀神社　字上熊野に鎮し、新宮の攝社とす。當社の神寶類十四種は美術工藝品

として近年國寶に列せられたり。

神倉山　熊野速玉神社の南八町に峙立す。四町の磴道を登り、山頂に至る。山頂には一巨石あり。卽ち神武紀に謂ゆる到熊野神邑且登天磐盾仍引軍、漸進海中とある天磐盾これなり。舊熊野速玉神社の御坐所とす。一書曰「山頂の巨石は、大さ四五丈ばかりにして、形蝦蟆の如き巨石ありて、これに差小きもの、三つ四つ相倚りて洞形をなし、こゝに高倉神社あり。神武天皇、此の地に至らせ給ひたる時、熊野の人、高倉下といふ者、夢兆によりて、靈劍を庫中に得て、これを天皇に献すること、書紀及び古事記に見えて、庫は則ち此の山ゆゑ、後に神倉山と稱し、祠を建てゝ高倉下を祀り、速玉神社の攝社として、社殿を朝廷幕府にて造營し、壯麗を極めたるが、是も今は形ばかりのものにて、昔を忍ぶ社殿の欄間に、人物、鳥獸、草木等を刻みたる板八枚を本社に留どめぬ。此の山よりは、市街を瞰下し、滄海を望み、絶景畫がくが如し」。

續古今「三熊野の神倉山の石たゝみのほりはてゝも猶祈るかな」。

徐福墓　新宮城址の東海岸なる字熊野地の田圃の中にあり。老樟二樹立てる本に、秦徐福之墓といへる五字を題す。德川頼宣の建つる所と言ふ。墓を距る三町ばかりにして小壠七所あり。徐福に從ひし者の墳なりと傳ふ。徐福はもと隣郡南牟婁郡木の本町の東、波多須浦なる矢賀の磯へ着船し、暫く居りて、後新宮等へ移り住みたるものとぞ。波多須古へは秦氏に作り、矢賀の丸山には、徐福の祠ありしが、海嘯のために流亡せしよし。徐福、秦の苛政を厭ひ、始皇帝が不老不死の仙藥をもとむるを欺きて、童男童女五百人を率ゐ、仙藥を蓬萊山に採り來たるとて、穀類の種、耕作の器具等を船に積み遁れ出でゝ我が國に殖民したりとなり。其の來たりたるは、孝靈天皇の御時といふ。本朝通鑑に、七十二年秦徐福來とあり。又神皇正統記には、始皇仙方を好みて、長生不死の藥を日本にもとむ、日本より、五帝三王の遺書をかの國にもとめしに始皇悉くこれを送るとあり。

新宮より猶ほ熊野街道を進めば、幾程もなく南牟婁郡との境界に至る。熊野川の河口左岸には鵜殿村あり。

新宮より此所に至る二里二十八町といふ。街道は是より井田、阿田和、有馬、木ノ本、曾根、三木里の諸邑を經由して北牟婁郡に入り、尾鷲より馬瀬、長島、を經て、遂に伊勢國に入る。南北牟婁郡は、現今三重縣の管治に屬せり。一書曰「南北牟婁の地、僻在すと雖も、海に汽船の定期航海ありて、北牟婁の長島、島勝、尾鷲、九木及び南牟婁の二木島、木ノ本諸港に日々寄港し、陸には熊野街道ありて、南勢より牟婁を貫通して、主要の都邑を聯絡し、その他の港浦皆な艀舟の便を備へ、交通機關、唯鐵路の敷設なきを恨むのみ。其の山は森林蓊鬱、營林の合理的にして、材質の完美、殆と全國に匹儔なく、其の海は暖流岸を洗ふて魚族群至し、漁獵の利勝けて賞るべからず。山水の風光は雄偉にして瀟洒、之に對すれば心曠く神旺し、塵襟忽開豁を覺え、稱して以て天下の絶勝と爲すべきあり。殊に冬季の溫暖なる、草木の開花伊勢に比して早きこと一ケ月餘なるを以て避寒地として最も適良なるを知るに足る」。鵜殿村の北方にして、小船村大字鮎田には武藏坊辨慶生家址なるものあり。古は、周回九尋に餘る大楠樹繁茂せしが、寛政の頃枯朽し爾後碑を建てゝこれを表標す。楊枝村より舟行三里餘、音無川の下游とす。また鮎谷の近傍相ノ谷村より蜜柑の産出多し。木ノ本より鮎田への里程九里といふ(熊野川の項參照すべし)。

布引瀧　入鹿村大字大河内にありて、郡治木ノ本町より凡そ九里といふ。落下凡四十尋、巖石に循うて落ち、寔に布を引けるが如く、一大素練を懸くるが如し。靜八町より舟行して上川村楊枝に上陸せば同所より陸程一里にしてこの瀧に達すべし。

鵜殿より木ノ本に至る七里二十三町とし、熊野川邊より木ノ本に間一帶の磯濱これを七里が濱といふ。その中間木ノ本の西南四里二十八町に阿田和あり。古來、捕鯨場として名高し。

木ノ本町　和歌山市より六十四里二十町を隔て、更に三重縣治へ四十一里十三町といふ。南牟婁郡の首邑にして、實に南紀屈指の都邑なり。地勢、西北には一帶の長丘連阜を負ひ、東は滄渺たる大洋に面し、人口四千六百七十を有す。舊時は紀藩より代官所を置きてこの郡を統治し、今に至るも郡役所、稅務署、區裁判所等の設置あり。汽船この地に寄港して、貨物の交易尤も自在なり。尾鷲へ陸程十一里、海路二十浬といふ。猶ほ南牟婁の名勝を探るにはまづこの海路この地に上陸し、此所を中心として巡遊するを便利とす。

花窟　木ノ本町の西南五町余、有井村大字有馬の海邊にあり。日本書紀の一書に見ゆる伊弉冉尊の御陵墓なりとなすもの卽ちこれとす。巨巖壁立すること凡そ二十七間正面には方三間ばかりの壇を作り、玉垣をめぐらし、拜所を設く。花窟の名は增基法

師の紀文に始めて見ゆる所、蓋し、花を以て祭れるよりその名起れるなり。下より十間ばかりの上方には大略五尺四面の洞穴あり。土人御カラウドといふ。祭日は毎年二月二日、十月二日の兩度にして、長繩を以て窟の上より前なる松樹にかけ、これに繩を編みて造れる幡三旒をつなぎ、幡の下には種々なる花を括りて神前に供ふ。祭事頗る寄古なり。また、窟の傍側七八間に王子の窟または聖の窟なる岩相對立し、伊弉丹尊の皇子軻遇突智の神靈を奉祀せるものなりと稱す。拜所を設くること花窟に相同じ。且、この邊一帶熊野浦に臨み、波濤の起伏せるさま、山嶽の蜿蜒たるさまと相待つて、一種他に觀るべからざるの奇觀を呈せり。日本紀、神代卷一書曰、伊弉冊尊生火神(輕遇突智)時、被灼而神退去矣、故葬於紀伊國熊野之有馬村焉、土俗祭此神之魂者、花時亦以花祭、又用鼓吹幡旗、歌舞而祭矣。拙堂南遊志曰「有馬村過一層巖、高數十丈、循巖而行、得一華表而入、有石遮欄、爲伊弉冊尊陵、號曰花窟、窟在巖根、巖面作髑髏狀、其巔狀甚奇異、如怒猊掀吻、其東側面石韋被之、翠倩可愛、蓋太古諸神皆住天上、至諾冊二尊、生國土遂降居焉、人間有陵墓、實以此爲始、萬古遺跡、如神在、拜跪而去、此間地陡入洋海、高浪蹴岸而去、過者往々爲浪卷去云、數町爲木本浦」。夫木集「紀の國のありまの村にます神のたむくる花は散らしとぞ思ふ」「かみまつる花の時にやなりぬらん有馬のむらにかくるゆふして」。山家集「みくまの御濱によする夕浪は花のいはやのこれぞ白木綿」。

鬼ゲ城 木の本町の東十町海岸にあり。巨巖屋宇の如く高さ十餘間、其の下深く窟をなし、怒濤其の根に吼えて奇絶名狀すべからず。(次項參照)。

清水寺 木の本町の東十餘町、大字大泊の觀音山にあり。比音山と號し、天臺宗、大同年間坂上田村麿の開創と稱し、本尊觀世音像は田村麿の持念佛なりと稱す。正德年間僧門嚴これを重興せしも、後祝融の災に遇ひ、現今の本堂は假堂なり。毎月舊曆十八日を以て緣日とす。三十三所圖會曰「大泊清水寺は浦の山上にあり。寺南三町ばかり山の半腹に瀧あり、高さ三十間、また木の本峠は大泊村より上る。鬼が城は木の

本峠の東の岬にあり。峠よりは見えず。船に乘りて見物すべし。岩屋は波打際より凡そ二丈五尺餘上り平地あり。それよりまた八尺ばかり上に二十疊ばかりの平地あり。夷賊の輩蟄居せしこともありなんと覺え、魔見が島は木の本峠より左の沖に見ゆる巨巖なり、清水寺の緣起に見えたり」。

文字岩　木ノ本町の西北花城山の西麓字疊堂と稱する地にあり。巨岩の高さ約二十間、幅約十二間、岩面に「鷲去徐仙子深入前秦雲借間超逸趣千古淮似宕」の五絕を刻す。文字の大さ方一尺五寸、橘南谿の秦徐福を追壞して刻むところと稱せり。

興福寺　木ノ本町より北二里二十町にして、飛鳥村大字神山に屬し、大阪街道の道側にあり。興福一に光福または高福に作る。山中の一幽寺にして、寺を南朝尊雅親王の遺跡と傳ふ。親王は實に後龜山帝の皇孫尊義王第三の御子に坐まし、南朝最後の親王といふ。南朝遺史曰「尊雅王は口殿と號し給ふ。口北山莊の謂にて、紀伊國の北山を口の莊と稱す。靈牌今紀伊國南牟婁郡神山村光福寺に殘れり。墓は光福寺より凡そ三十町を隔て寺谷村といふ所にあり云々」。猶ほこの故跡に關しては名勝地誌藤本氏說、地名辭書吉田氏說、その他殘櫻記、南方紀傳、大日本史等の記述に合考すべし。

花知の勝　木ノ本町より北山河畔の小川口まで道路八里、車行の便あり。此所に宿し、翌朝舟を僦ひ、北山川を溯ること約一里なれば、入鹿村大字木津呂に達す。前出瀞八町の勝は卽ち此所にあり。花知の勝は更に瀞八町より上流なる北山川の沿岸にありて、神川村に屬す。木ノ本町よりは西方五里餘を隔つ。同町より有井村井戸神川村神山を經、沿道の勝蹟を探りつゝ、花知に遊びて木津呂に出で、以て瀞八町を訪ふもまた順路なり（前出熊野川及び瀞八町の項參照）。

木ノ本町より泊峠・大吹峠の二小坂を越ゆれば新鹿村大字波田須に達す。此の間道程約一里半、道路より海岸に偏し秦徐福墓と稱するものあり。續西遊記曰「秦人徐福祠は新宮にあり（前段徐福墓參考）。その徐福の船より始めて陸に上りし地は新宮より六七里東にて、波多須村といふ所なり。此所の古老の言傳に、徐福十二月晦宿、波多須村の矢賀の磯へ着船して、此邊に暫らく住居し、後に本宮新宮那智の方へ移り住めり。波多須の矢賀の丸山といふ所に蓬萊山といふ桶ありて、小さき祠もありしに、三十年はかり以南の洪水に桶も祠

も流れ失せぬ」。吉田氏曰「按に、徐福の事は疑はしげれど、漂着人の故事を傳ふるや明かなり。蓬萊山といふは古墳の謂なり。その例多し。」更に、波田須より新鹿を經て逢神坂を越ゆれば、荒阪村に至る。村は木ノ町より約三里の所にあり。風趣掬すべし。

室古、阿古師神社　荒坂村に鎮座し、兩社入海を隔てゝ相對す。木ノ本町よりは約三里なり。而して、室古社には彦稻飯命、阿古師社には三毛入沼命を奉祀す。往古、神武天皇東征に際し、舟師二木島沖にて暴風に遭遇せしが、この兩神とも海に入り薨じ給ふ。暴風靜穩に歸せし後、偶々土人等天皇の兩神の屍を搜し給ふに行遭ひ奉り、卽ち詔を命けて御屍を索め得、此所に奉葬せしを後世社祠に崇めしものといふ。神武天皇紀曰「引軍漸進、海中卒遇暴風、皇舟漂蕩、時稻飯命相歎曰、嗟乎我祖則天神、母則海神、如何厄我於陸、厄我於海乎、言訖乃拔劒入海、中略三毛入野命亦恨之曰、我母及姨並是海神、何爲起波瀾以灌溺乎、則踏浪秀往乎常世鄉矣」。

二木島港　荒阪村は神武天皇東征の際丹敷戸畔を誅し給ひし故地にして、荒阪津は今の二木島港なるべく、荒阪とは二木島の東曾根太郎、曾根次郎等の峻坂を指せるなるべしとの說、尤も信據するに足るべしといふ。二木島港は汽船の寄港所にして、木ノ本との往來最も便なり。こゝより以東は岬灣出入して、鰹、鮪その他の漁獲物多く、賀田、古江、三木里等の港浦いづれも風光明媚の水鄉なり。

熊野街道は、木ノ本を出でゝより鬼山峠の山間を貫き迂回して尾鷲町に出づと雖も、現今は海岸に沿うて直ちに尾鷲町へ通ずるの道を開けり。丸木浦は漁業繁盛の地にして、大敷網と稱する漁網はまた此の地の特色として世に知らる。

尾鷲町　北牟婁第一の市街にして、戸數一千六百餘・人口九千百八十餘を有し。東西十町、南北二十餘町に亙る。此の地古への藩府にあらざるも、京阪地方及び名古屋地方に貨物を運輸するの要港たるを以て鉅賈豪商尠なからず。郡役所・稅務署等の設あり。津市より三十里三十町、新宮町へ十四里三十餘町を隔つ。灣內廣くして、桃頭・娑婆留・雀島・裸島等の小嶼碁布羅列し甚だ風趣に富めり。大阪熱田通航の滊船はこの地に寄港す。山崎氏地誌曰「三重縣の林業は南北牟婁郡を以て盛大となし、ことに北牟婁郡の如きは、氣候溫暖・濕氣に富むを以て、杉・檜の類到る所其成育を遂げ、奈良縣

吉野地方と共に造林の好良なるを以て名高し。就中其の檜材は尾鷲町に於て集散するを以て特に尾鷲材と稱せられ、本邦建築材の有名なるものとす。船津村・相賀村・引本村・三野瀬村・須賀利村・尾鷲村の栽培段別は三百十八町歩ありて、皆海岸を距る一里若くば三里の間にあり。其の造材には蒸氣力を利用し、搬出には溪水を利用して、是を引本・尾鷲・長島等の諸港より名古屋若くば東京に致す。皆松・材・檜等にして、交通不便の爲めには濫伐を免れ、林齡の古きもの多し。尾鷲町は古來奥熊野と稱せられし地方の一部にして、美林に富みたる民林の好摸範を成せり。其造林業は本地方中最も古きもの〻一にして、今を距る二百七十餘年前杉・檜の植栽を施し、茲に初めて造林の端緒を開き、現今に至りては廣漠なる天然林は漸次整然たる造林に變更せらるゝに至り、尾鷲町全面積の九割餘即ち三千二百九十餘町歩を占む。概ね民有林にして國有林は僅かに其の一割半を占むるのみ。樹種の多くは杉・扁柏なれども又樅・栂等を交ゆ。尾鷲町には近時尾鷲港山林物産改良組合を組織し、山林物産の製法改良及販路の擴張を圖れるありて、將來大に有望なり」。

中村山公園　尾鷲町の西方數町にあり。耕地の中に孤立せる一小丘陵なれども、海山の眺望に富めると、躑躅花多きとを以て有名なり。山よりは、よく尾鷲港内の全景を展望し得べし。この他、町内字中井には尾鷲神社あり。

倉谷竹林　尾鷲町より十町を隔て、中井浦字倉谷にあり。土井氏の所有にして、面積約一町に餘る。享保中、薩州より移植せし江南竹は叢生し、大なるは周圍三尺長さ八十尺に至るものあり。

尾鷲より馬越峠を越えて相賀、引本に至る、約二里なり。小山は相賀村に屬し、この地の長泉寺に孝子勘七の墓あり。

引本町　戸數六百・人口二千九百四十餘を有し、海灣南より北に向ひ、深く陸地を咬む事二里餘、波靜かにして恰も湖水の如く、風浪を避けて此處に來泊する船舶頗る多く帆檣常に林立せり。市街は海岸に沿ふて櫛比し、風光明媚、また海産に富めり。避

寒避略に好し。

須賀利港　引本町と須賀利との間小灣深く入るものを須賀利港となす。引本町の所管にして、港は東北西の三面に山を繞らし、南は海に面するが故に、夏暑からず冬暖に、避暑避寒の地に適せり。村内に普濟寺あり、眺望の佳を以て聞ゆ。

大臺ヶ原山林　引本より北西に入る事約四里にして船津村あり。山鳥狩獵の好適地とす。而も、此の邊一帶の山林は氣候溫暖なるが故に、杉・檜の類密生し、赤羽川を利して搬出また容易なれば、山林の事業大に發達す。更に進む事五里餘、御料殖林地を經過すれば、千古斧斤を入れずと傳ふ大臺ヶ原山の森林に入るべし。舊藩政の頃和歌山藩士の探險せし後、明治の初年松浦某之を開拓せんとして果さず、近來御料林の經營により船津より大臺ヶ原を穿ち大和吉野郡河上に出づる道路を開通するに至れり。氣候清涼なれば尤も避暑に適し、且、山中奇勝頗る多く、就中、大蛇ヶ倉の如き尤も名あり。

大木森瀧　船津村大字船津の西北方四十餘町の山中にあり。和州吉野に越ゆる道路の西方に當る。瀑布の高十五丈、巾一丈瀧壺深く兩側に奇巖屏立す。引本灣より遙かに之れを望むべし。

魚跳溪　船津の隣村相賀村大字便山の西方銚子川の上流なる瀧の川にあり。引本より五十町にして、舟便あり。尾總よりは三里とす。水中、鉅巖峙立し、水流奔放瀉下し、魚跳て溯るより此の名あり。著名の勝區にして來遊の雅客常に踵を接す。

街道は、相賀、引本より馬瀬、三浦を經て長島に達す。須賀利港より島勝を經來れる間道は、馬瀬に於て本道に相會せり。白浦はこの間道に近く、島勝浦と共に桂城村に管治す。勝獄の港灣にして、長島、錦より渡船の便あり。島勝浦は長島町より四海里の南に位し、汽船の寄港所なり。且、この浦には天滿洞門とて、海浪の浸蝕作用よりなれる洞穴あり。長き十五間、高巾八間、これに海水を通ぜり。而も、附近の岩礁巉崖數十仞、松樹點綴して姿態萬容、遊ぶべく、釣るべく、眞に東紀の仙郷と云ふべし。

長島町　引本町より東北三里にあり。人口四千五百四十を有する小都邑にして、海陸交通の衝に當り、商業繁盛とす。即ち伊勢山田地方より南勢を過ぎ來れる熊野街道は

この地に於て始めて海岸に出づるものとす。されば東より北牟婁に遊ばんと欲する旅客は、汽船にてこの地に上陸するか、または熊野街道を野後より定期馬車にてこの地に到り、更に舟路を利して、諸所を歴遊するなり。猶ほ當港の入口を江の浦と稱す。漁船の繫泊場なり。その前面大向ひの山脈東に延びて海に入るところ、月夜山影模糊として江上に浮び、形ち恰も涅槃像に似たりとて、稱して寢釋迦山と云ふ。勝景の地なり。

名倉灣　長島町の東方八丁、二鄕村にあり。水を隔てゝ村内朝間の山腹を望み、甚だ風趣に富む。

丹敷戸畔塚　長島町の東に當り、錦村の灣頭人家の櫛比せる街道に面し丹敷戸畔の石棺と稱するものあり。毎年一月七日には神武祭とて丹敷戸畔が降伏の狀に擬する祭禮を執行す。また村内不行谷と呼ぶ地にて神代の古墳と傳ふるものあり。一說、この附近一帶を上古は丹敷と稱して丹敷戸畔の領有に係り神武帝東征の時過ざり給ひしと唱ふ。

熊野街道は長島町より二鄕を經、更に荷坂峠(五十三米)を踰えて勢州に入る。二鄕より分れて海岸に近く東を指す間道も錦村より國界を越えて同じく勢州に入る。

新撰名勝地誌卷九終

明治四十五年七月　日印刷
明治四十五年七月　日發行

（新撰名勝地誌卷九南海道）
（定價金六拾錢）

著作權所有

編者　田山花袋

發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　河合辰太郎
東京市下谷區二長町一番地

印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　（東京市日本橋區本町三丁目）
博文館
振替貯金口座東京二四〇番
販賣部用電話本局二六二〇番

新撰名勝地誌

田山花袋君編

◉發行所 博文館

本書の特色

- ●交通路に由て名勝を記したる事其一也
- ●産業沿革にも出來得る限り注意を拂ひたる事其二也
- ●つとめて新しき材料によりてこれを記したる事其三也
- ●旅行者の伴侶たらしめんが爲めに紙質を精選し裝釘を堅牢ならしめたる事其四也

巻一 ●畿内（山城○大和○河内○和泉○攝津）
（銅版）近畿地方の圖○京都市及其附近○奈良及其附近○大阪市

巻二 ●東海道西部（伊賀○伊勢○志摩○尾張○三河○遠江○駿河○甲斐○伊豆）
（銅版）東海道西半部地方の圖○宇治、山田附近○名古屋市

巻三 ●東海道東部（相模○武藏○安房○上總○下總○常陸）
（銅版）東海道東半部の圖○鎌倉、逗子○東京市、横濱市

巻四 ●東山道西部（近江○美濃○飛驒○信濃○上野○下野）
（銅版）東山道西部地方の圖○岐阜市、高山町○長野市、松本町○宇都宮市及日光附近

巻五 ●東山道東北部（磐城○岩代○陸前○陸中○陸奥○羽前○羽後）
（銅版）總括圖○仙臺市、松島、鹽釜○山形市、酒田町○秋田市、土崎港町

勝地誌

殊に最も特色とすべきは編者の足跡殆ど海内に洽く殘山剩水と雖も訪はざるなく其記述と排列と頗る精確を極めたる事是也況んや處々に各名勝地の寫眞數十種を挿入し宛然人をして足其の地を踏むの思ひあらしむるに於てをや旅行せんと欲するもの各地名勝の分布を知らんと欲するものは來りて本書を見よ

巻六 ●北陸道（若狹○越前○加賀○能登○越中○越後○佐渡）
（銅版）北陸道略圖○金澤附近及金澤市の圖○新潟附近及新潟市の圖

巻七 ●山陽道（播磨○美作○備前○備中○備後○安藝○周防○長門）
（銅版）總括圖○岡山市及其附近○廣島市及其附近○山口市、尾道市

巻八 ●山陰道（丹波○丹後○但馬○因幡○伯耆○出雲○石見○隱岐）
（銅版）總括圖○鳥取市及其附近○松江市及其附近

巻九 ●南海道（紀伊○淡路○阿波○讃岐○伊豫○土佐）
（銅版）總括圖○和歌山市○德島市及其附近

巻十 ●西海道（筑前○筑後○豐前○豐後○肥前○肥後○日向○大隅○薩摩○壹岐○對馬）
（續刊）

巻十一 ●北海道及樺太（渡島○後志○石狩○天鹽○北見○膽振○日高○十勝○釧路○千島○樺太）

巻十二 ●臺灣及琉球

洋裝四六判總布上製裝釘頗美麗
各卷銅版精密地圖及寫眞版挿入
紙數各册五百頁以上印刷鮮明紙質精良

正價一册 金六拾錢 郵税一册 金八錢

故樋口一葉女史遺稿
幸田露伴君序

（前編三版後編最新刊）

一葉全集

全二冊

前編 日記及書簡文範 紙數八百五十餘頁 正價金壹圓七拾錢 小包料十二錢

後編 小說及隨筆 紙數六百二十餘頁 正價金壹圓貳拾錢 小包料十二錢

故樋口一葉女史の諸作は明治文壇の光輝也、女史が遺せる所の日記四十四卷は、女史が晩年六年間の記錄にして、操持不撓なる一女性の立志傳なると共に、感情熾烈なる女作家の忌憚なき告白錄也、人生に對する僞らざる觀察誌也、亂調なりし當時の文壇裡面史也、增訂一葉全集は從來刊行の女史が諸作に加ふるに此比類無き祕書と、女史が小說隨筆の未だ公刊せられしことあらざるものとを收む。前後兩編合せて千五百餘頁、此稀世の女作家の眞面目を江湖に紹介するに於て遺憾なからん、敢て薦む。

窪田空穗君著

註解古今名歌新選

全一冊洋裝四六判 正價金壹圓 紙數約八百頁 郵稅金拾錢

本書は萬葉集、八代集、重なる歌人の家集及び明治新興の短歌中より著者が日夕愛誦措かざるもの三千餘首を選出せるもの是れを類題別に排列し鑑頭には各歌の大意を略述して解意に便せしむ著者が明治歌壇に旗一幟を樹立して奇才を弄するは世既に定評あり、其詩的炯眼に觸れて拾收せる群芳秀英は皆是れ金聲玉振の響を不朽に傳ふるもの是れ聽がて後進作家の軌範にして又著者嗜好の半面なり

岡本綺堂君著（新刊）●發行所 博文館

綺堂脚本集

全一冊 洋裝四六判美本 紙數三百五十餘頁 正價金五拾錢 郵稅金六錢

本書收むる所の脚本、黑船話、貞任宗任、小笠原島、佐渡の文覺、簑輪の心中、修禪寺物語の六篇となす、貞任宗任、簑輪の心中、修禪寺物語等は既に市川左團次により明治座に演せられて好評を博せる物、材は古しと雖も巧みに扱ひて新しき味を加へ讀んで感興多きと共に坐ろ舞臺上の功果をも想察せしむるものあり、其の他黑船話と言ひ、小笠原島と言ひ、佐渡の文覺と言ひ、義理あれば人情もあり、綴るに美しき戀を以てし、場毎に變化を見せて目先を新にせんと努めたる道が文士劇として舞臺を踏みたる作者だけに拔目なきを見る。

島崎藤村君著

●小說食後

蒲原有明君序 南薰造君畫 紙數四百八十頁 四六判定價金八拾錢郵稅八錢

生活を豐富にしたいと思ひながら氣儘にもならないで居る人達が、卓を圍み、果實を置き、互に語らうとする如き心地で編んだものが斯の小說集であります。嬉しい悲しい人の世のさま〳〵長い話、短い話すべて十八篇あります。いづれも著者が最近に淺草片町で筆を執つたものです

岡田八千代君編

閨秀小說十二篇

紙數三百二十頁 四六判定價金四拾五錢郵稅六錢

○宮子（與謝野晶子）○四十餘日（水野仙子）○其一幕（長谷川時雨）○妹の緣（尾島菊子）○機運（田村とし子）○實家（岩田百合子）○おはま（森田しげ女）○モデル（國木田治子）○路傍の人（生田嘉子）○多事（小栗籌子）○行末（木內錠子）○同居人（岡田八千代）。

理學士 山崎直方君
理學士 佐藤傳藏君 共著

補 齋藤文學士 大日向理學士 大塚文學士 其他
助 田山花袋 諸士

大日本地誌

全部拾册

地理の書世に多し而も其描寫其觀察皆平凡の地誌たるに止り、又地形地勢より說き出して產業の盛衰、法制、宗敎、軍事等に及びたるものあるを見ず、本書は歐洲に於ける最新の體裁に鑑み全く在來の地誌と其目的方針を異にし、地文人文の關係を詳說して人爲の加工が如何に自然に影響するかの蹟を推究し文明發展の系統を知悉するに足らしむ、若し夫れ各地の史蹟を推考して變革と推移を開述し特殊產業の來歷より交通機關の發展が土地の盛衰興廢を左右し山嶽開けて都市となり桑田變じて蒼海となす底の變遷に關て其制度人情の趨向を親知するに感興津々湧くが如し況んや每册鮮明美麗なる地圖數十葉及び各地勝區地名區の寫眞版八十餘頁を挿入し本文と相俟つて完全ならしむるに於てをや彼の乾燥無味なる偏狹の地理書と同一視すべからざるなり。

既刊

第一卷 ●關東（方面地圖八枚 寫眞版八十一枚）（正價金二圓五拾錢 小包料金拾二錢）
掲載縣名（東京府及伊豆七島。千葉縣。栃木縣。小笠原島。埼玉縣。茨城縣、群馬縣。

第二卷 ●奧羽（方面地圖八枚 寫眞版八十二枚）（正價金二圓五拾錢 小包料金拾二錢）
掲載縣名（福島縣。靑森縣。山形縣。宮城縣。秋田縣。岩手縣

第三卷 ●中部（方面地圖九枚 寫眞版八十六枚）（正價金二圓五拾錢 小包料金拾六錢）
掲載縣名（愛知縣。靜岡縣。山梨縣。岐阜縣。長野縣

第四卷 ●近畿（方面地圖六枚 寫眞版二百餘牧）（正價三圓 小包料金拾六錢）
掲載縣名（京都府。大阪府。兵庫縣。奈良縣。三重縣。滋賀縣。和歌山縣。

第五卷 ●北陸（方面地圖二枚 寫眞版八十六枚）（正價金二圓五拾錢 小包料金拾二錢）
掲載縣名（福井縣。富山縣。石川縣。新潟縣

第六卷 ●中國（方面地圖一枚 寫眞版四十八枚）（正價金二圓五拾錢 小包料金拾二錢）
掲載縣名（岡山縣。廣島縣。山口縣。鳥取縣。島根縣

第七卷 ●四國（方面地圖四枚 寫眞版五十六枚）（正價金二圓五拾錢 小包料金拾二錢）
掲載縣名（德島縣。香川縣。愛媛縣。高知縣

第八卷 ●九州（方面地圖七枚 寫眞版七十一枚）（正價金三圓 小包料金拾六錢）
掲載國名（筑前。筑後。豐前。豐後。肥前。肥後。日向。大隅。薩摩。壹岐。對馬。

續刊

第九卷 ●北海道及樺太
第十卷 ●琉球及臺灣

東京 博文館發行 本町

各册大判洋裝 背皮金字入 總クロース 特製美本 紙數約壹萬頁 每卷 地圖寫眞版數十枚 挿入

五大洲探檢家 中村直吉君　押川春浪君共著　●發行所　博文館

五大洲探檢記

洋裝四六判紙數一册三百頁 口絵挿入 正價 各册 金四拾五錢 郵税 各金六錢

寫眞版數葉

既刊書名

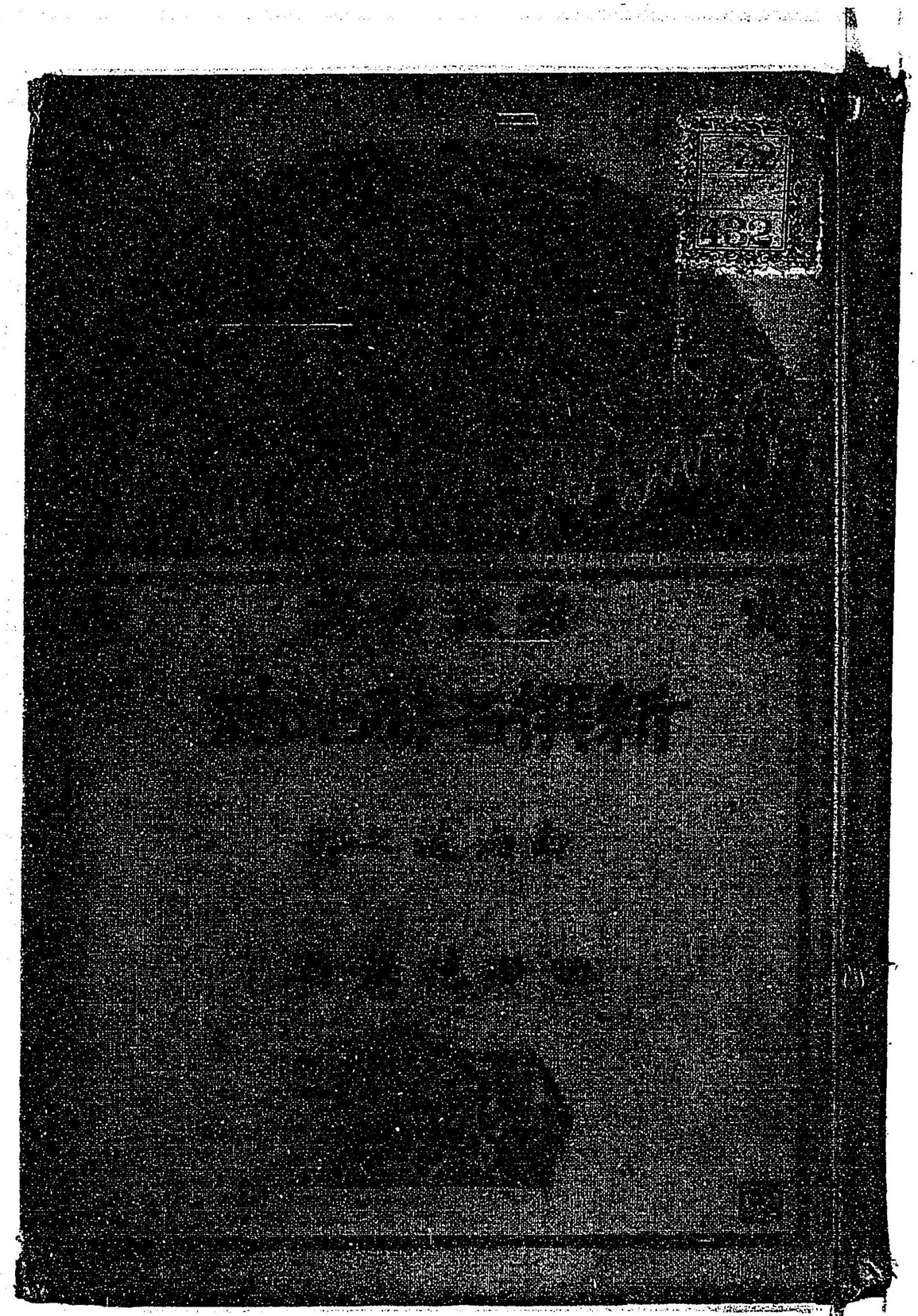
第一卷 ●亞細亞大陸横行　第二卷 ●南洋印度奇觀

第三卷 ●鐵脚縱横　第四卷 ●亞弗利加一周

第五卷 ●歐洲無錢旅行

（以下逐次刊行）

踏破す全世界十五萬哩歲月を費すこと六年有餘此日本探檢家の足跡は五大洲到る處に印して歐米の大旅行家顏色なく前人未發の大發見あり鬼神も驚く大冒險あり珍談奇聞百出して殆んど應接に遑あらざらんとす少年諸子明窓淨几の下に是れを繙けばたゞに此快男子の痛絶なる偉業に壯快を覺ゆるのみならず孤劍飄然遠く去つて五大洲の山河を踏破するの思ひあらん切に愛讀を祈る。

72
482

4